宇田川
準一譯

小學讀本

三

洋学文庫
文庫8
B 76
3

宇田川準一 譯
小笠原東陽 校

小學讀本

巻三

文學社藏版章

文學社刊行

39-8124

小學讀本巻之三

宇田川準一 譯
小笠原東陽 校

第五課

第一

此女兒は、愛らしき人形と、鞠を持てり、◎汝は、此二つを好めりや、○人形を扱ふには、常に、善く心を用ふべ

し、○汝は、鞠を、つくことを、得るや、○若し、鞠を速くつかんと欲せば、汝も亦、これに隨ひて、手を速く動かさゞることを、得ざるなり、

第二

汝、彼女子は、此童子を愛をると、思ふや、○此童子は、彼女子を愛するや、○汝は、此童子の、愛らしき圓き顔を、見たりや、○女子は、童子

を愛し、童子は、女子を愛をると思ふ、○此童子は、愛らしき顔なり、○其頭髮は、長くして、垂れ下りたり、○其足は、裸あれども、時候、暖なるゆゑに、凍らず、○汝は、此童子の名を、知れりや、○吾は、其名を知らざるあり、

第三

爰に、鼻、耳、口及び眼を示せる圖あり、○鼻は、物を嗅ぎ、耳は、物を聞き、口は、物を味ひ、又談話を爲し、眼は、物を見る爲めの、道具あり、○

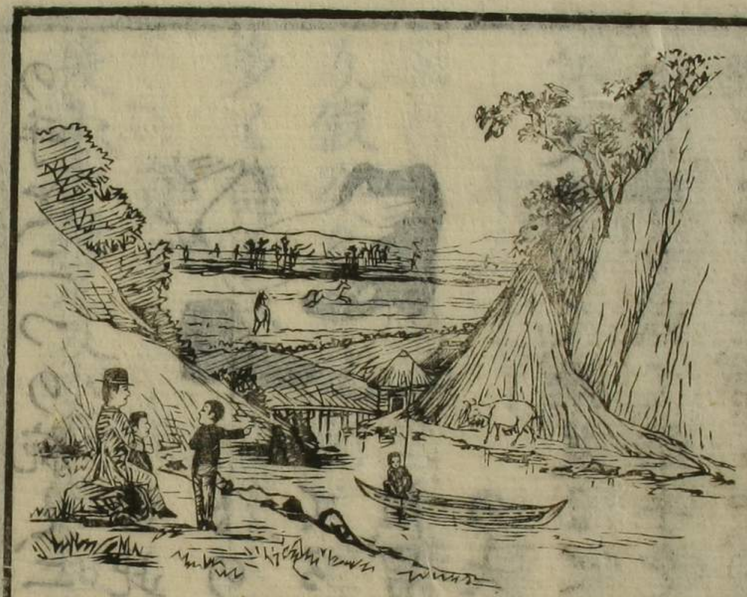
我等は皆、一つの鼻と、一つの口と、二つの眼と、二つの耳とを持てり、○我等は、一つの口と、二つの眼と、耳とを、持てるに由り、假令、多く見聞くと雖も、口は、よく愼みて、多く語るべからず、

第四

爰に、手腕足及び長靴、短靴あり、○我等は、二つの手と、二つの腕と、二つの足とを持てり、○

○此二樣の靴は、足を穿くものなり、○汝は、長靴を持てる手を見よ、○それは、男子の手ふりや、○此腕の大ふるを見よ、○我等は、片足を以て、兩足をもて歩める如く、多く歩き、又、片手を以て、兩手を用ひる時の如く、能く働くことを、得るや、○否、兩なごら、決して、能

はざるふり、



第五

汝等、吾の側らに來りて、各其見得る所のものを、語るべし、○一人の童子は、山河舟家、及び馬を見ると云ひ、又、一人の童子は、此五つの者の外に、樹溪橋牛、

及び廣野を見ると云ふ、○吾は、汝等二人の、見得る者の外、彼樹上に、白き鳥の、止るを見、又、遠き所に、農夫の耕やすを見るなり、

第六

これは、蝶なりや、又、蜻蛉なりや、○それハ、蜻蛉にあらぞ、蝶なり、○若し、これを捕へんとすれバ、其蝶は、如何するや、○汝の、手を出だすを見れバ、

忽ち飛びて、逃げ去るべし、○蝶に、鳥の如く、大なるものあり、○蝶に、小なるものと、大ふるものとあれども、鳥の如く大ふるもの、あらじ、

第七

爰に、樹の枝に、止りたる鳥あり、○此鳥の名は、何と謂ふや、○此鳥は、梟なりや、○然り、梟は、終日、茂りたる、老樹の上に、居れども、日暮るれば、飛び出づるものなり、○梟は、大なる、圓き眼あり、○然れども、晝は、物を見ること、能はざる故、夜よ至りて、餌を索むるなり、

第八

此女兒は、母と共に、玩物店に至れり、○母は、女兒に向ひて曰ふ、汝は、何を買ふことを願ふや、人形なりや、又鞠なりやと、○吾は、其二つを願へども、最も、人形を好めり、○然らば、

汝の爲めに、其二つを買ふゆゑに、善く心を用ひて、毀つことなかれ、○此女兒は、人形と、鞠とを持ち、喜びて、家に歸れり、

第九

馬に乘れる人を見よ、○此馬は、速く走れる狀なり、○汝は、馬に乘りて、彼の如く、速く走らせることを、好めり、○吾は、馬に乘ることを、好めども、速く走らせずして、徐かに、歩ませることを、好めり、○此馬は、何の爲めに、速く、走れるや、○彼は、走らせることを、好みて、馬を、鞭うてりや、○彼は、速く走らせることを、好めども、馬を、鞭うつことなし、○

汝は、彼の田顧をろを、見さりや、○吾は、之を、見たれども、其何故ふることを、知らざるあり、

第十

爰に三人あり、○其内の一人は、左の手に、帽と、杖とを持てり、○彼の眼は、圓く大ふして、腮は、甚ざ肥たり、○彼の髪の、長くして、頸の處ゑ垂れ下る

を見よ、○彼は、長くして、温ふる上衣を、着せり、○彼は、唯今、寒き所より入り來りたるふり、○帽を冠りたる人は、上衣を、着ざるのみならず、腕を露はせり、○彼の働ける室内は、暖ふれば、なり、○彼は、他より來りたる人に、其談を聞くことを、樂めり、○又、其側らに、立ちたる童子は、此二人の談を、聽聞せるなり、

第十一

此人等は、草を苅れり、○此草の、乾きさるも

のを乾草と云ふ、○草の枯れたるときは、速よ、車に載せ、馬に牽かせて、小屋ゑ運び入るべし、○若し雨降れば、再び濕るれば、ふり、○此乾草は、牛馬等の、食物なり、○馬は乾草、及び穀物の中、何を最も好めりや、○馬は、最も燕麥を好めり、○牛

も亦、燕麥を好めりや、○然り、○羊は、燕麥を好まざるや、○否羊も亦、之を好めり、

第六課

第一

汝少年、岸より遠く、水中ゑ、行くことなかれ、○汝は、水中ゑ入りて、何を取らんと、思ふや、○我は、美しき蓮の花と、其大なる葉とを、取ら

んと思へり、○これを取ることも、宜しけれども、能く心を用ひて、遠く行くべからず、○誤りて、深き處に、陷ることあれバなり、

第二

鵠ハ、大なる鳥なり、○此鳥の雛の間ハ、其羽、皆鼠色なれども、生長するときは、雪の如き、白色となる、○此鳥ハ、頸長くして、脛短し、○此鳥も、木の葉、小枝、又は草を集めて、巣を造る、其卵ハ、白くして大なり、○汝等ハ、此鳥を、

見たることありや、○否、我ハ、一度も見さることなし、○此鳥も、如何なる處に、棲めるや、○此鳥も、大抵、水上に浮游し、又は、空中を、飛び翔るものなり、

第三

此數多の童子等は、皆其日課を、脩めんが爲めに、學校に來れり、○此學校には、石盤と、地

第四

今日は甚だ寒き日なりて、地面は固まり、樹圍と、書物とあり、○汝等は、學校に行くことを、好むや、○汝等ハ、書物を好み、又語を綴ることを得るや、○吾は、汝等の、好みて學校に行き、勉めて、其日課を學ぶんことを欲するなり、

上、又池上にも、雪積れり、○童子等は、橇に乘りて、氷雪の上を、滑り行くことを、好めり、○此遊を爲すに、よく心を用ひざれば、その上に倒れて、傷を受くることあるべし、○汝ら、童子の、橇に乘りて、坂を滑り下るを、見たりや、○汝ハ、橇に乘りたる小女を、童子の

推〜行くを見さりや、○此遊を爲るには、互に心を用ひて、親切を盡すべし、

第五

此童子は、巣の中に、卵の在るを見出したり、○これを、雞の卵なれども、其雞は、今他所に、行きさるなり、○鴨、又は鵝も、卵を生めども、其味は、雞の卵より、旨からず、○鳥の巣を造るも、種々ふーて、樹

上に造るものと、地面に造るものとあり、又草にて造り、藁にて造り、木の葉、或は、小枝にて造るものあり、○凡そ、鳥は、己れの造りさる巣の中に、卵を生みて後、其上に坐り、久しくこれを暖めて、其雛を孵すものなり、

第六

三人の童子と、犬の走るを見よ、○彼等は、何の爲めに走るや、○汝は、彼等を、競走をすると思ふや、○否、吾は、競走をするにあらずと思へ

り、○然らば何の爲めなりや、○彼等ハ、元來、跳走そること、ゝ、好むものゝ、て、今、豚の、小屋より逃げ出したるを見さる故に、之を捕へんとそるふり、

第七

爰に、童子と女兒とあり、○童子は、手ゝ、紅き石竹の一束を持ち、女兒ハ、頭髪ゝ、白き薔薇の花を挿めり、○此二人は、其石竹と、薔薇とを何處ゝ於て、得しや、○彼等ハ、花園ゝ於て、これを得さるふり、○

此等の草木は、何ゝ由りて、生長そるや、○草木は、皆、太陽の光熱と、雨露とを受け得て、生長そるものなり、故ゝ、若し、これを受くること能はざれバ、忽ち、枯るゝものなり、

第八

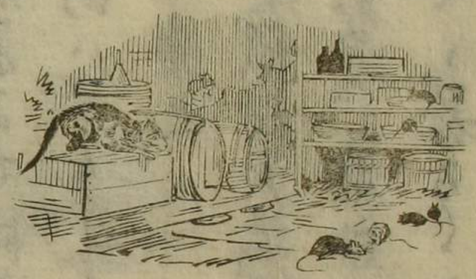
爰よ、來りて見よ、○彼の馬車よは、幼年の男女、多く乘りて、走れり、○汝ハ、彼等の、名を知れりや、○吾ハ、之を知とり、彼等ハ、皆我學校よ來る、生徒なり、○汝は、彼等を、何處よ行くと、思ふや、○彼等ハ、遠方よ行きて、遊ぶんとするなり、○彼二人ハ、何故よ、

帽を脱ぎさるや、○彼等ハ、我親友なるゆゑ、吾を見て、帽を脱きたるなり、○吾も亦、彼等と、同遊をすることを、甚ぐ好めど、彼等ハ、吾ぐ病氣よて、同遊をすると、能ハざるを知りて、誘ハざりしふり、

第九

凡そ、鼠は、大抵晝間ハ、穴中よ潛居して、出ることなし、○然れとも、夜よ至れバ、各其穴より出で、暴るゝものなり、○其時は、甕よ臨み

て、水を飲むものあり、床上を走るものあり、又、棚より上りて、食餌を索むるものあり、○然れども、若し、猫の聲を聞けば、忽ち、怖れ靜まりて、其穴中より、逃げ込むものなり、



第十

來りて聞け、○汝は、此響を、箱の中なりと、思ふや、○此響を、何なりと思ふや、○鼠なりや、又猫ならずや、○吾は其響の、甚だ小なるより、由りて恐らく小さき鼠なるべしと、思つり、○汝は、鼠の、此の如き聲を、聞きたることありや、○鼠も、時より、由りて、此の如き聲を、發することあり、

第十一

爰ニ、四人の童子あり、○其中の二人は坐りて、二人は立てり、○其傍らに腰を掛けさる、老人は、此四人に向ひて曰ふ、汝等、若し、生涯、幸福ならんことを欲せバ、幼年の時より、總て、行を正しくせべし、○且つ、學問を勉強ハ、年の幼きは、猶ほ春の如し、此時を、才智の

種子を、腦裏に蒔くべき、良期なり、能く意を注きて、此時期を、怠惰に過ごすべからず、

爰に又、右の手に杖を持ち、左の手を、童子の肩に置きて、歩行せる老人あり、○此老人も、初めハ、童子にして、汝等の如く、或は走り、或は跳りて、遊びさるなり、○然れども、今ハ、眼も足も、共に、不自由になりさる故、

兒童よ倚りて、歩行せり、○此老人は、譬へば、冬の時節よ、至りたるなり、

第十二

此人々は、小舟よ乗りて、湖上よ浮び、網を用ひて、魚を捕へ、さり、○凡て、網を湖中よ引くときは、其網よ入りたる魚を、大小善惡よ關はらぐ、皆、これを捕ふることを得べし、○汝は、此三人と、彼等の捕へたる、數多の魚とを、見さりや、○此湖の濱へ積み上げたる魚は、

甚ぐ多くして、善きものと、惡しきものとあり、○立ちたる、一人は、今、惡しき魚二尾を、湖中よ投げ返したり、○跪きさる人は、今、大なる旨き魚を、壺よ入れんとせ、○彼等は、此壺に、滿つべき、旨き魚を得るときは、家よ持ち歸りて、互よ分配をるなり、

第十三

汝は、此處を、如何なる場所と、思ふや、○此處
も、數多の、美しき草木ある故よ、花園なるべ
し、○汝も、左の手よ鋤を持ち、右の手ふ帽を
持ちたる、童子を見さりや、○汝も、此童子の側ら
ふ立ちさる、女兒は、手に、何を持つと思ふや、○吾
小さき鍬ふりと思へり、○彼等は、此美しき花園

よ於て、遊ぶことを好むや、○然り、彼等は、甚
だ、之を好めり、○汝ハ、腋よ、籠を抱きさる人
も、亦、女兒なりと思ふや、○否、彼は、家婢よし
て、瓜と茄子とを、挙き取るため、此處よ來り
しふり、

第十四

爰よ、又花園あり、○一人の男ハ、葡萄を盛り
たる籠を持てり、○童子ハ、今、葡萄を挙き取
る所なり、○此葡萄ハ、能く熟しさり、○又別

に、坐りたる一人の女と、童子とあり、○其前よ、立ちたる男ハ、女よ向ひて、談話をする狀なり、○此男ハ、手拭を冠りて、足よは、裳を着せず、

又茲よ、花園を掃除をる處の老人と、其側らに、立ちたる二人の童子とあり、○汝ハ、此老人は、童子よ何を、話をゝを、知れりや、○我ハ、これを、知れり、○老人ハ、彼等よ向ひて、曰ふ、

愛ぶべき汝等よ、此花園の中に在る果實、又は花よ、決して觸るゝ〳〵からぞ、吾ハ、追々に、甘き果實と、美しき花とを取りて、汝等よ、分

ち與ふるべけれバなり、

第七課

第一

大小、二匹の羊あり、○汝ハ羊を見ることを、好まざるや、○汝ハ羊の丘側ヨ跳り走りて、遊つるを見たることありや、○吾ハ曾て、見さることなし、○羊の毛ハ、猫又ハ牛の毛と、其性質、相同しきや、

○否、羊の毛ハ、甚だ細くして、柔らなれども、猫、又牛の毛ハ、然らず、○汝、羊の毛ハ、何ヨ用ひるかを、知れりや、○羊の毛ハ、先づ、其體ヨり剪り取り、之を晒して、糸ヨ紡き、次ヨ織りて、羅紗を製し、然る後、裁縫して、衣服を造るものなり、

第二

爰ヨ、果實を盛りたる、籠あり、○此内ヨハ、瓜、葡萄、其他、種々の果實入れり、○其葡萄の蔓

は、籠より掛りて垂れさり、○汝も地上に映りさる葡萄蔓と、籠との影を見たりや、○汝を、今太陽を見ること能をざれども、其籠より右方より在るか、又、左方より在るかを、語ることを得るや、○其影は、籠の左方より在るゆゑ、太陽は、必ず、其右方に在るあり、

第三

白き犬と、黑き犬との二匹ありて、或日、共に遊歩せり、○白き犬は、良き犬にして、少しも、他物を害をることなし、○然るに、黑き犬は、惡しき犬にして、他の犬と出逢ふときは、必ず、これに向ひて怒り、又は、嚙みつくあり、○此二匹の犬は、終に、大なる市街に到りて、數多の犬と、出逢ひたり、○白き犬は、他の諸犬に、親切にして、更に、之を害をることなけれども、黑き犬は、其出逢ふ毎に、必ず、之に向ひて、

怒り吠るのみならず、終に近寄りたるものに、嚙みつきさり、○此時數多の男子等は、各棒或は石を持ち來りて、黑き犬を擊ちけるに、二匹の敵犬走り來りて、之を嚙み殺し、白き犬も、亦之と共に殺されさり、是惡しき犬と、同道したるとめなり、

此談話は、獸類に限らず、人に於ても、相同じき故に、能く心を用ひて、善き朋友を撰ぶべきことを教ふるものなり、

第四

大陽の昇るを見よ、○今日は、快き天氣なるべし、○雞も、塒を出で、鳥は啼きて、樹より樹に遷れり、○草は、朝露を帶ひ、青くして爽かふ

り、○此人等は、皆農夫なり、野に行きて畑を耕し、又、穀物を苅る、○汝は、手に小さき鍬を持ちたる、童子を見さりや、○彼は、何の爲めに、野に行きさりと、思ふや、○彼も、農業を覽る爲めに、畜犬を伴ひて、此處に來りさるなり、

第五

今は、日中にして、甚だ熱し、○大陽の照る處は、熱けれども、樹木の蔭は、涼し、○其蔭に、坐りたる牛と、立ちたる牛と、あり、又、水を飲む爲めに、小河に入りさる牛あり、○農夫は、今、甚だ熱きを、業を止め、家に歸りて、午飯を食るなり、○小河に架けたる、橋あり、○汝は、其橋を見しや、○又、遠方に見ゆるは、誰の家なりと、思ふや、○これは、卽ち、農家なり、○農夫は、元來、

農業は、多く、時を費やすものなり、

第六

大陽没したり、速に暗くなるべし、○農夫は、野より歸り來り、牛は、小屋に入り、雞は、塒に上れり、○此女子は、小屋に行き、牛乳を搾り、提桶に充さしめて、此處に來りたるなり、○汝は、新しき牛乳を、飲むことを好めりや、○此猫も、亦之を、貰はんと欲する如く、見ゆるや、○吾は、之を飲むことを、甚だ好めり、○汝は、戸口の側らに坐する、犬を見たりや、又此犬は、何を考へ、居ると思ふや、○之は、良き犬にして、晝は、農夫の爲めに、多くの用を爲し、又、夜は、能く家を守りて、盜賊の忍ひ入る患、ふうらしむるなり、

第七

鷲は、鳥の中にて、最も勇猛にして、大膽なる

ゆゑ、鳥の王と稱せ、又、肉食して、生長するゆゑ、肉食鳥の種類に屬せり、○此鳥ハ、空中を、高く飛ひ翔りて、嶮しき岩上に、巣を造れども、食餌を求めむる爲めに、平地へ下り來ることあり、○此鳥も、屢〻、鵞鴨、兎、或ハ羊等を掴み去るのみならず、又、人をも、攫〻去ることあり、○爰に、鷲が童子を攫み去らんとしたる、一話あり、○或日、二人の童子の、野に遊び居さるとき、一羽の、大なる鷲、不意に飛び來りて、其一人を攫〻去らんとしされども、攫み外して、再び攫み去らんとせしとき、彼童子は、幸に、大ふる鎌を、持ちたるゆゑ、其左翼の下を擊ちて、遂に、之を殺しさ

り、

第八

山羊は、其性の、暴きものと、馴れたるものとあり、○暴き山羊は、山の間に住めり、○爰に畫きたるは、皆、暴き山羊にして、其一つは、高き岩の上に立ち、他は、皆、下に居れり、○山羊は、羊と、甚だ相

似さり、○然れども、山羊には、髭ありて、羊には、之なし、○山羊の角は、羊の角と相同じからず、

第九

獅は、獸類中、最も勇猛なるものなれば、之を獸類の王と稱す、其食餌を索むるに出逢ふ者は、之が爲めに害せらるべし、又、其吼る聲も實に、恐怖を

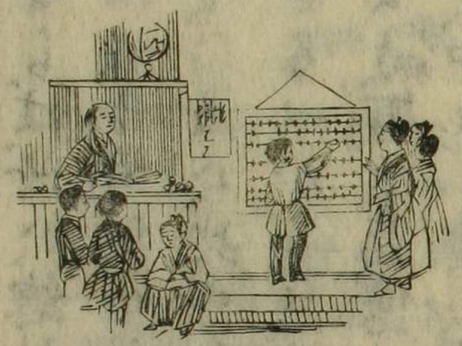
べきものゝ、○然れども、充分、人に馴れさるものを見るときは、其甚だ勇猛ゝることを、想ひざるゝ、○獅の、甚だ大ゝして、勇猛ゝるものは、亞非利加の南部に産す、○獅も、亦鷲と同じく、家畜を掠め去り、又、時として、里に來りて、人を啣つ去ることあり、○又、獅ハ、其食餌とすべきものゝ、近つき來るを、待つものゝ

て、爰に畫けるは、斑馬を捕つんため、岩石上に坐りて、之を待てる狀なり、○然れども、其斑馬は、遠所を走れるゆゑ、之を捕ふること、能ハざるなり、

第十

爰に、記臆すべき、一つの昔話あり、○或る二三人の惡少年、一日、數多の蛙の住める、池の邊に立てり、○此蛙等ハ、少年等に向ひて、更に害を爲さゞれども、少年等ハ、一匹の蛙の、

頭を水上ゟ出をを見て、直ちに、石を擲ちたり、○此時、其蛙は、少年等ゟ向ひて曰ふ、貴君等、其石を擲つことは、假令慰樂なるべけをども、我の爲めゟは、一命ゟ關はることふるを、思をざるやと、此昔話は、我ゟ向ひて、害を爲さゞるものには



は、我よりも、亦、害を爲をへからざ、又他人の、悲痛、困難を見て、悅ひ笑ふ如きは、決して、爲をべからざることふるを、教へしものなり、

第十一

汝は、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、二十、三十、等と、物を數ふることを得るや、○吾若し、汝ゟ、十個の林檎を與へ、彼も亦、六個の林檎を與ふる

ならば、汝ハ、總計、幾何を得さうと謂ふや、○汝ハ、十六個の林檎を得たりと謂ふふるべし、○汝ハ、此の如く、物を數ふることを學ざるべからざ、汝は、石盤、又は紙上ヨ、一、二、三より、百、千、萬、億ヨ至る迄の、數字を、書くことを、知れりや、○若し、書くこと能ハざれバ、又、之を學バざるべからず、

第十二

駱駝ハ、大なる沙漠の在る、地方ヨ於ては、甚だ要用ふる、動物ふして、此沙漠卽ち沙海を旅行をるとき、用ひるゆゑ、或は、之を沙漠の舟と云ふ、○駱駝は、頸長く、頭小さく、脚長く、

跖廣く、軀體剛くして、其背部ヨ、二腦あるものと、一腦あるものとあり、駱駝ハ、重き荷物を負ひ、數日の間、水を飲まずして、乾燥したる沙漠中を、

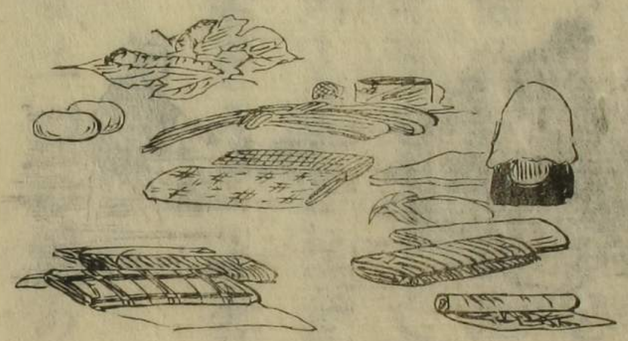
毎日、十二三里、又は、十七八里、旅行し得るものゝふして、若し之に荷物を負たしめ、又、之を卸さんとするときは、跪きて、之を爲さしむ、此動物ハ、沙漠地方の、人民に、種々の用を、爲すものにして、荷物を負たしむるの外に、其肉と乳とは、食物を爲し、毛ハ織りて、羅紗を製することを、得るなり、

第十三

爰に、二つの圖あり、皆農夫の爲せる業を、示

せるものなり、○初めの圖は、農夫の、野に出で、畑を耘り、又、種を蒔く狀にして、次きの圖は、熟したるものを、苅り取り、之を束ねて、家に持ち運ふ所なり、○汝は、意を注きて、彼等の、働く狀を、見るときは、如何ふる感を、起すや、○我も、亦彼等の

如く、其本業を、勉めざるべからゞと、思ふなり、



第十四

汝ハ、衣服と爲すべき品物ハ、何より製するかを、知まりや、○吾は、之を知れり、○草綿より製する者と、麻より造る者と、蠶より作る者とあり、○汝は、夏と冬とに於て、如何なる色の衣服を着ることを、好めりや、○吾は、夏ハ白き色、冬は他の色の衣服を、着ることを好めり、○白き色のものは、涼くして、他の色のものは、暖なれバなり、

第十五

凡そ貨幣は、各人の、所有すべきものゝ中、最も必要の物にして、若し、之なければ、家屋食物、衣服、其他、種々の物品を、得ること能はゞ、

○爰ニ世々の貨幣あり、先づ、其價格を知り、又、其算へ方を、知らさるべからゞ、○貨幣に、三類あり、其黄金ニて造れる者を、金貨と云ひ、銀ニて造れる者を、銀貨と云ひ、銅ニて造れる者を、銅貨と云ふ、

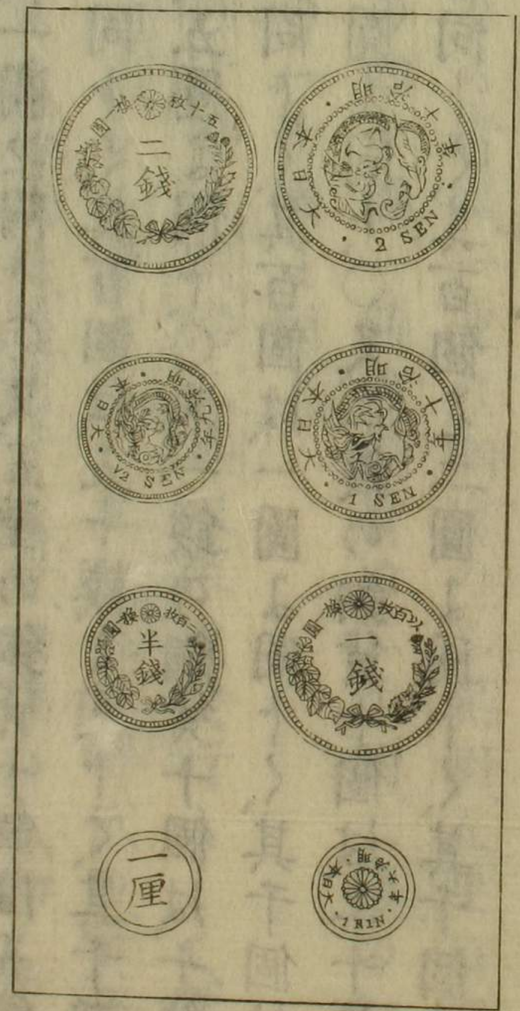
金貨ニ五種あり、即ち二十圓、十圓、五圓、二圓一圓ふ〜て、其表裏の模様と、大小の比例とは、左の如し、

銀貨も亦五種あり、即ち一圓五十錢、二十錢、十錢、五錢ニ〜て、其表裏の模様と、大小の比

例とは、左の如し

銅貨よ四種あり、即ち二錢、一錢、五厘、一厘よ

して、其表裏の模様と、大小の比例とは、左の如し、



右十四種の貨幣の中、一厘の銅貨十個ハ、一

錢と同じく、其百個は、十錢に同じく、其千個は、一圓に同じ○又、五厘の銅貨十個は、五錢と同じく、其百個は、五十錢と同じく、其千個も、五圓と同じ、○又、一錢の銅貨十個は、十錢に同じく、其百個は、一圓と同じく、其千個は、十圓と同じ、○又、二錢の銅貨十個は、二十錢と同じく、其百個も、二圓と同じく、其千個も、二十圓に同じ、

故と、銀貨の最大なる者は、一厘の銅貨の千個、五厘の銅貨の二百個、一錢の銅貨の百個、二錢の銅貨の五十個と同じ、○又、金貨の最大なる者は、一厘の銅貨の二萬個、五厘の銅貨の四千個、一錢の銅貨の二千個、二錢の銅貨の一千個と同じ、

右の貨幣は、明治三年以來の、發行よりて、當時通用せる者なり、○其他、幕府時代の、貨幣にして、今、尚ほ、通用する者、四種あり、即ち八厘、二厘、一厘五毛、一厘の錢、是なり、

小學讀本卷之三終

明治十五年五月廿九日版權免許
同　年九月出版

著譯人　東京府士族　宇田川準一　東京西小川町一丁目七番地
出版　文學社　東京馬喰町二丁目一番地

見本